The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	清原家「大学抄」の成立過程の研究
Author(s)	張, 硯君
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/70779
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　張　硯君　）	
論文題名	清原家「大学抄」の成立過程の研究

論文内容の要旨

本論文は、室町時代の明経博士家である清原家の「大学抄」の総合的な研究で、序章「研究史と本論文の目的」、第一章「清原宣賢『大学』講義の手控に関する再考」、第二章「「大学抄」の系統分類について」、第三章「講義手控と『大学聴塵』」、第四章「『大学聴塵』の作成方法と構想」、第五章「家説の継承について」、終章「家説の伝承経路を求めて–今後の展望として–」からなり、巻末に「主要参考文献一覧」「引用文献一覧」、翻刻京都大学附属図書館清家文庫蔵『大学抄』（林宗和聞書抄）などをを収めている。

清原家の抄物の研究は、大きくは訓点資料研究の立場と日本漢文学・日本儒学の立場とに分かれ、今日の研究者は前者が大半を占める状況にある。近年、抄物の注釈内容への関心は高まりつつあるが、多くは典籍における古注から新注への推移の解明を中心にし、朱子新注学を顕彰させた『大学』『中庸』はとかく新しい風潮しか反映しないものとして等閑視してきた嫌いがある。ただ、平安末期の清原頼業にまつわる『大学』『中庸』表彰説が伝わっているだけに、清原家における『大学』の講学、「大学抄」の源流と変容などを考察することは、抄物の実態を解明するとともに、学問史の面からも重要である。

本論文の構成と概要は次の通りである。

第一章「清原宣賢『大学』講義の手控に関する再考」では、これまでの定説に依拠した『大学聴塵』理解を批判的に捉え、林宗和が列席した天文元年の『大学』講義において、講者の宣賢が利用した講義手控について、再検討を行った。林宗和が残した聞書の転写本である天文二十三年本を軸に考察したところ、従来、手控とされてきた『大学聴塵』と天文二十三年本との内容のあいだに、かなりの乖離が存在することが判明された。一方、「清原宣賢マタハ後人講某聞書大学抄」系統に分類された釈梵舜書写『清家大学抄』（以下、梵舜本）が聞書抄と高い一致を示していることが新たに注目される。『清家大学抄』には、さらに聞書抄と一致する独自の抄文や、直接の依拠として認められる内容が含まれていることから、その系統のものは本来の手控であった可能性があると提示した。

第二章「「大学抄」の系統分類について」では、「大学抄」の系統分類を捉え直すことにした。従来阿部隆一氏が「清原家講説大学抄（甲）種本」と「清原家講説大学抄（乙）種本」として分類された聞書抄の二系統に関して、（甲）系統は『大学聴塵』より（乙）系統と明らかな対応性を持っていることから、（乙）系統の実態・性質への解明が急がれる。この系統の諸抄をめぐって、とりわけ古写本に見える注記増補の有無を基準とする際、当該系統の下位分類が可能となることについて論を進めた。加えて、増補された注記は宣賢の講述と関わっている点、中でも京都大学附属図書館谷村文庫蔵本が、元来の手控抄と最も近似性が高く、古態を留めているものとして認められることを指摘した。

第三章「講義手控と『大学聴塵』」では、第一章の結論を踏まえ、梵舜本に反映していると想定される講義手控と『大学聴塵』との書承関係について考察した。具体的には、梵舜本との比較を行い、結果として、梵舜本をはじめとする講義の手控と思われる系統は、『大学聴塵』を講義のために簡略化したものとは認め難く、むしろそれ自体が『大学聴塵』に先立つ先行注釈書に位置付けられる可能性が高いことを明らかにした。さらに、その注解内容に独立性が認めあれる点や、『四書童子訓』からの影響が認めかねる点などからも、講義手控は『大学聴塵』に先立つ文献として位置付けることが可能である、と判断された。

第四章「『大学聴塵』の作成方法と構想」では、『大学聴塵』と梵舜本との関係性に着目し、『大学聴塵』の生成のあり方について考察した。『大学聴塵』に見える梵舜本の摂取のあり方は、形式上と内容の両面において、それぞれの特徴を見せている。形式上は特に経文の分け方を参考にしており、内容の面では、『四書童子訓』にない注解を摂取する際、「一ニハ」といった文言で梵舜本の説を提示する特徴をもつことが確認された。

第五章「家説の継承について」では、梵舜本をはじめとする講義の手控と思われる系統の本質の解明に迫った。梵舜本には、従来指摘されなかった「常宗御講」との文言があり、その注解は良賢の講説を伝えたものとして考えられ

る。一方、該抄には業忠の講義の様相を表徴する箇所が見え、また注解の内容に関しても、業忠の講義記録である『論語聞書』との共通性が認められることから、講義手控は業忠の講説を摂取した注釈書であるともが想定される。現に、清原家の学問の影響を受けた林羅山による「大学抄」においても、同様の見解が示されており、講義手控は従来知られてこなかった清原家の学説を伝えるものと認めてよいと思われる。従って、宣賢は家説に基づいて講義を行い、またそれを基盤にして、『大学聴塵』を編纂したということになる。結論として、『大学』解釈のあり方に反映されている宣賢の意識は、先代の家説に基づきつつ、なお他の解釈を吸収する姿勢であり、それが宣賢の新注学に対する学問的態度の一特色であると同時に、「聴塵類」の編纂に底流している意識でもあると言えるのである。

終章「家説の伝承経路を求めて−今後の展望として−」では、本研究の結論と今後の課題について述べた。本研究は清原家「大学抄」成立過程の解明に軸を置いて論を立てたが、今後はここに構築された「大学抄」の構図に、さらに生命力を吹き込み、「大学抄」に関わる家説伝承の解明から、清原家抄物の総合的研究に取り組むこととしたい。そうすることによって、現在個別に扱っている考察を、より立体的な「大学抄」研究に発展させていく、という今後の方向性を提示した。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（張　硯君　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　准教授	柴田 芳成
	副 査　教授	加藤 均
	副 査　准教授	蔦 清行
	副 査　教授	五之治 昌比呂
	副 査　京都大学名誉教授	木田 章義

論文審査の結果の要旨

本論文は、中世から近世にかけての学問世界を代表する清原家における家学の形成について、『大学』の注釈書である「大学抄」を中心に据えて考察したものである。先行研究の見解に修正を促す指摘に満ちた内容であり、先行研究の踏襲に止まって停滞気味であった当該研究領域に新たな視界を与えるものとして評価される。以下に本論文の構成と内容について略述する。

序章では、清原家における経書学の大要、および「大学抄」の諸本、研究状況を整理したうえで、本論文の目的と方法が提示される。第一章では、学問伝授の場での手控と聞書との関係について取り上げる。清原宣賢自筆の『大学聴塵』（以下『聴塵』）は、宣賢の学問を集大成したものであり、講義手控として利用されたと考えられてきたが、宣賢講義の聞書である天文二十三年書写「林宗和聞書」（以下天文二十三年本）と本文比較すると、部分的な一致はあるものの、天文二十三年本には『聴塵』よりも多くの講説が含まれることが確認される。ここで、聞書と見なされてきた「清原宣賢マタハ後人講某聞書大学抄」に分類される、清原家の伝書を写したらしい梵舜本（以下梵舜本）を対照してみると、直接の依拠をうかがわせるほどに天文二十三年本との一致度が高いことがわかる。そこから、宣賢の別の講義、あるいは清家の後人による講義の聞書と考えられてきた梵舜本の系統が宣賢の講義の場で利用された手控である可能性が高いということが指摘される。第二章は、梵舜本をはじめとする聞書とされてきた系統の再考。古写本３本、刊本１本を例に、本文と注釈内容、注記記載の異同を精査し、二つの系統に分類できることを提示する。第三章では、第二章での分類案を受け、梵舜本と『聴塵』との成立の前後関係を考える。天文二十三年本と、『聴塵』への影響が明らかな『四書童子訓』を参照しつつ、梵舜本と『聴塵』の本文、注解の比較、錯簡の問題を検討することによって、梵舜本の系統は『聴塵』に先行する可能性があることを述べる。第四章は宣賢の大学講学の集大成としての『聴塵』について取り上げ、これまで『四書童子訓』との関係しか問題とされてこなかった点について、梵舜本をはじめとする講義の手控えと思われる諸本との関連も看過できないことを指摘する。そして、『聴塵』の編纂にあたっては、『四書童子訓』と、梵舜本が用いたのと同じ資料を利用していると考えられることから、多様な解説を取り入れることが重視されていると認められ、その性格として、必ずしも従来想定されてきたような講義用の注釈書とはいえないのではないかと提議する。第五章は、ここまでの議論に加え、『聴塵』に見られる清原家の先人に関する記述を元に、清原家学問の形成の様相を検討し、家学大成者としての宣賢には、先代の学説への尊重の念と、時代に応じた新注を含めた多様な解釈を吸収すること、それらを融合することに努めた姿勢が見られるとまとめる。終章では、同じく「聴塵類」とされる抄物資料の『左伝聴塵』の記事に照らして、『聴塵』の家説伝承経路のレベルを考える必要と、今後の研究課題について述べる。

以上の通り、本論文は『大学聴塵』の生成の問題を含め、『大学』研究の成果としての抄物類を中心に据えて、清原家の学問形成の様相を考察したものである。資料編として提出された翻刻「京都大学附属図書館清家文庫蔵『大学抄』」からもわかるように、各資料に対する精細な本文批判という文献学としての基礎的な作業を丁寧に行った上で進められたものであり、資料の扱い方はおおむね適切であると認められる。各章に取り上げられた問題についても、先行研究で見落とされていた点を改め

て検証することを通して、従来の説に見直しを迫る指摘がなされており、高く評価できる内容となっている。一部に、論述の進め方として、後に検証される内容を前に提示していたり、検証結果をまとめる場合に例示から全体像へいたる間の説明が簡略にすぎたりといった、読者に対してのより丁寧な書き方が求められる箇所もあるが、全体としての論旨を損なうものではない。また、今後の課題についても自覚的である。

以上により、論文審査委員会は、全員一致して、本論文が博士の学位を授与するに妥当であると判断した。